



日本人のホタル観：江戸時代まで

The Japanese View of Fireflies : Up to the Edo Period

Received 7 August, 2024

Revised 30 November, 2024

Accepted 4 December, 2024

Porntip Wakabayashi¹

要旨

現在、日本人はホタルと多様な係わり方を持っている。大別すれば学芸面、観光面、自然保護面、研究面、教育面等になる。日本人のホタルとの係わりは江戸時代、特に後期に大きく変わる。そして、ホタルとの係わりが紆余曲折を経て現在の多面的な係わりに発展するが、この論考では変換点になる江戸後期までのホタル観の変遷を見て行く。中国の影響を受けたホタル観が日本的な思いを内に秘めるホタル観に代わり、庶民の暮らしの向上と共にホタルが行楽の対象になり、都市化された町では商品化されるまでの変化である。ホタルの光はどの国でも人を引き付ける魅力をもつものだが、日本ほど多面的な係わりをする国は世界にはないと考えられる。このことがこの論考を始めようと思った契機である。

キーワード ホタル観 行楽 商品化

Abstract

Currently, the Japanese engage with fireflies in diverse ways. These interactions can be broadly categorized into cultural appreciation, tourism, nature conservation, research, and education. The relationship between the Japanese and fireflies underwent a significant transformation during the Edo period, particularly in its later stages. This relationship has evolved into the multifaceted engagement observed

¹ Lecturer at Department of Thai and Oriental Languages, Faculty of Humanities, Ramkhamhaeng University
e-mail : porntip.w@rumail.ru.ac.th



today, shaped by various historical developments. This essay aims to explore the evolution of firefly perceptions up to the critical turning point of the late Edo period. Initially influenced by Chinese thought, the view on fireflies gradually shifted to embody a distinctly Japanese sentiment. As the quality of life for the common people improved, fireflies became a focus of leisure activities, and in urbanized areas, they were eventually subjected to commercialization. The luminescence of fireflies possesses a captivating allure. While interactions with fireflies can be found in various countries, it appears that no other nation engages with them as multifacetedly as Japan does. This observation of Japan's unique engagement serves as the impetus for this study.

Keywords: View of fireflies, Leisure activities, Commercialization

1. 先行研究

平安時代（794 - 1185）のホタルに関する中国文学の影響については丹羽（1992）がある。中国人のホタル観が日本人に与えた影響について、当時の日本人が現実のホタルの実情と合わなくとも、例えばホタルは秋のものだとか、腐った草から生まれてくるとかの視点で詠っていることを教えてくれる。また、本間（1998）は中国人のホタル観が日本人のそれと合わない事実がどのように日本人の意識の中で解消されていくかについての記述がある。

ホタルと人との具体的な係わりは螢狩りという言葉で表される。螢狩りとはホタルを捕まえ、その光を楽しむことであり、そういう言葉が定着することは、ホタル狩りという行為が広く行われるようになったことを意味している。そして、この行為は遊びであり、この行為を多くの者でなすようになると、行為を楽しいものとするための歌が歌われるようになる。後藤好正（2015）（2016）（2018）の一連の論考は一般庶民がホタル狩りを楽しむようになった時期やその様子を教えてくれる。また、大阪



市立自然史博物館叢書④「鳴く虫セレクション」の中の加納康嗣（2008）は当時のスズムシ等の鳴く虫がどのように商品になって行ったかを解説しており、その商売の一つにホタルがあったことも述べている。また、三橋淳、小西正泰編（2014）は文化としての昆虫について他国を含め広範囲に渡って記述があり、ホタルに関しても「ホタルの文学」という章が設けられ、簡単な文学史が触れられている。また、ホタルの商品化の記述もある。竹内誠監修（2003）は花見や潮干狩り、自社参り等の当時の江戸庶民の行楽について述べられており、ホタル狩りについて少し触れられている。

2. 現在一般的に鑑賞の対象になっているホタル

日本には、沖縄を除くと 10 種の光るホタルがいる。その中で現在、一般に観賞の対象となっているホタルはゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルの 3 種である。このうち、ヒメボタルは幼虫が陸生で、水生のゲンジボタル、ヘイケボタルと異なる。陸生ボタル生態研究会のサイト、陸生ホタル生態研究会（2007）より、3 種のホタルについて簡単に要約して特徴を説明する。

2.1 ゲンジボタル (*Luciola cruciata*)

本州、四国、九州に分布する。日本でホタルといえばこのホタルのことを指す。成虫は体長 10 - 18 mm もある大型のホタルで、光も強く美しい。幼虫は、きれいな川の流れから丘陵部の湿地やため池まで生息している。発光間隔に西日本の 2 秒型、東日本の 4 秒型、中間部には 3 秒型がある。河川の改良や護岸工事、また、農薬が川に流れ込むことなどによって、場所によってはその姿が見られなくなったところがある。発生のピークは 5 月下旬から 6 月下旬。

2.2 ヘイケボタル (*Luciola lateralis*)

本州、四国、九州、それに北海道からシベリア、朝鮮半島、中国東北部に分布する。成虫は体長 5 - 7 mm である。湿地ばかりでなく、流水にも適応しているが、早くから日本に棲みつき水田耕作とともに生息域を拡大してきたので、60 年代から 90 年代



にかけて水田で大量に使用された農薬の影響を受け、コメどころでは壊滅状態に追い込まれている。大都市近郊でも大規模宅地開発のため、生息地ごと埋め立てられ消滅したところが多い。発生は6月から8月まで。

2.3 ヒメボタル (*Luciola parvula*)

本州、四国、九州、屋久島に分布する。成虫の体長は6 - 7 mmで、海拔1700mくらいの高山から、街中まで多様な環境に生息している。特に東海、中部、近畿地方では、バスが通る通りの裏の小さな緑地にも生息している。名古屋城外堀のヒメボタルは大都市の特異な環境の中で繁殖しているホタルとして注目されている。幼虫は陸上に住み、成虫のメスは飛ぶことが出来ない。宅地造成や河川の改修などにより、消えていったところがある。発生のピークは5月下旬から6月下旬まで。

3. ホタル観の変遷

3.1 上代のホタル

日本人がホタルをどのように見ていたかは古代の文書ではっきりわかるものは何もない。万葉集（伊藤,2008）では鳴く虫のように詠まれることはなかったし、詠まれたものも巻十三のたった1首である。

- この月は 君来まさむと 大舟の 思ひ頼みて いつしかと 我が待ち居れば
もみじ葉の 過ぎて去にきと 玉梓の 使ひの言えば 螢なす ほのかに聞きて
大地を 炎と踏みて 立ちて居て 行くへも知らず 朝霧の 思ひ迷ひて
丈足らず 八尺の嘆き 嘆けども 驚をなみと いづくにか 君がまさむと
天雲の 行きのまにまに 射ゆ鹿の 行きも死なむと 思へども 道の知らね
ば ひとり居て 君に恋ふるに 音のみし泣かゆ (3344)

この長歌の次の反歌の後の題詞に「右の二首、ただし、或るは云はく、この短歌は防人の妻が作る所なり、と。しかばすなはち、長歌もまたこれと同じく作りたることを知るべし。」となっている。

これは東国の方に住む人の妻が歌った歌であって、都の貴族が歌ったものでないことがわかる。万葉集には中心をなす都の貴族が歌ったホタルの歌はないことにな



る。また、この長歌では「螢なす」は「ほのか」の枕詞として使われている。「螢なす」と「ほのかに」は「萬葉集三」（小島、木下、佐竹,1976）の注で次のように説明されている。

螢なす：ホノカの枕詞。螢の光のわずかなことからたとえた。

ほのかに：一部分だけを、わずかに見たり聞いたりすることを表す副詞。

ホタルの光はわずかな明るさを持つものとして、捉えられているのみで、万葉集にはホタルそのものを歌った歌はない。また、日本書紀（坂本、家永、井上、大野,2013）の卷第二、神代下に高天原から瓊瓊杵尊を降ろそうとする葦原中国には

- 「彼の地に、多に螢火の光く神、及び蠅声す邪しき神有り」
(訳：その地にはホタルのように光る神やハエのように騒々しいよこしまな神
が
いる)

と述べてある。この文脈ではホタルのように光る神はいい神ではないことは確実である。当時の夜は現在よりもかなり暗かっただろうし、ホタルの数も多かったと考えられる。暗闇に湧き上がるよう群れるホタルは観賞の対象ではなかっただろう。この日本書紀の文からはホタルは当時の人間にとって、何か不気味なもの、ややもすれば恐ろしいものとしての認識が強かったように思われる。

3.2 平安時代のホタル

この時代の歌に詠まれているホタルは中国文学の影響を受けていといわれている。丹羽（1992）と本間（1998）の論考から、その影響を大きく分けてみると次の4つになる。

- 1) ホタルが光と関係のあるものに譬えられている。
- 2) 恋の歌に歌われている。
- 3) 秋の存在とされている。
- 4) 枯れて腐った草から生まれるとされている。



以下、各項ごとに、どのように中国詩の影響を受けているかを簡単に見ていこう。

1) ホタルが光と関係のあるものに譬えられている。

まず、丹羽（1992）に載せられた中国詩の一部を引用する。「初学記」卷三十にある「螢を詠す」（ホタルを詠む）という題の詩である。

- 空に騰れば 星隕つに類す
樹を払へば 花生ずるが若し
井には神火の照るかと疑ひ
簾には夜珠の明きに似たり

(訳：空に上れば星が落ちてくるようで
木を払えばホタルの光で花が咲いたように見える
井戸には神火が燃えているような気がするし
簾には宝石が光っているようだ)

ここでは「初学記」から一例取り上げただけだが、丹羽（1992）によれば「初学記」やほかにホタルがよく取り上げられている「芸文類聚」は奈良、平安朝人が愛用した書物で、この詩ではホタルは星や花や神火や宝石に譬えられているという。

次に平安朝人がどのようにホタルを譬えたかをみていく。「伊勢物語」（大津,2008）八十七段に次の歌が詠まれている。

- ——（前略）——やどりの方を見やれば、海人の漁火多く見ゆるに、かのあるじのおとこよむ。
(訳：——（前略）——家の方を見れば、海人の焚く漁火が多く見えるので、主
人の男が詠む)
- 晴るる夜の 星か川辺の 螢かも 我が住むかたの 海人の焚く火か
(訳：私の家の方で海人の焚く篝火は晴れた夜の星か、川辺のホタルのようだ)



さらに、二つの歌を挙げてみる。

- 沢水に 空なる星の うつるかと 見ゆるは夜半の 蛍なりけり（後拾遺和歌集 217）

（訳：沢の水に空の星がうつっているようにみえるのは暗闇を飛ぶホタルであるよ）

- いさり火の 昔のひかり ほのみえて 蘆屋のさとに とぶ螢かな（新古今和歌集 255）

（訳：蘆屋の里に飛ぶホタルの光は昔、華やかだった沖の漁火と重なる）

最初の歌は海人の焚く篝火を晴れた日の星か川辺のホタルのようだと歌っている歌である。また次の歌ではホタルの光は星に、三つ目の歌ではいさり火に譬えられている。中国の詩と同じように、ホタルは光るものに譬えられているが、歌から浮かび上がる映像にはずいぶん日本的なものも感じられる。

2) 恋の歌に歌われている。

これも丹羽（1992）からの引用だが、「玉台新詠」に次の詩がある。

- 昼蟬すでに念を傷ましむ

夜露また衣を濡す

昔別れしときかつて何をか道ひしそ

今夕螢火飛ぶ

（訳：昼の蝉は心をいためさせる

夜露はまた衣を濡らす

昔別れた時、何か過ぎて行った

この夕べには螢が飛んでいる）

この恋の歌にはセミとホタルが一緒に用いられている。日本の歌にもこのようにセミとホタルが両方用いられた恋の歌がある。



- 明けたてば 蟬のおりはえ 鳴きくらし 夜は螢の もえこそわたれ（古今集 543）
(訳：夜が明ければ、セミのように鳴き【泣き】暮らし、夜はホタルのように思い焦がれています)
- 恋すれば もゆる螢も なく蝉も 我身のほかの ものとやは見る（千載和歌集 813）
(訳：恋をしているので、心を焦がして燃えるホタルも鳴く【泣く】蝉も、自分のことのように思われる。)

このように、ホタルが恋の歌に用いられるだけでなく、セミと共に用いられることも、平安朝人が中国詩の影響を受けていることは間違いないことだと考えられる。

3) 秋の存在とされている。

また、丹羽（1992）からの引用に白氏文集の巻十三に「景空寺に旅をして、幽上人の院に宿る」という題の漢詩がある。この詩の3行目は「**秋雨病僧閑**」、6行目には「**螢飛廊宇間**」という詩句が見られる。訳してみれば、

- 「**秋雨病僧閑**」（訳：秋雨の降る中 病んだ僧が静かに座している）
- 「**螢飛廊宇間**」（訳：ホタルは渡殿の廊と廊の間を舞い飛ぶ）

このように中国詩ではホタルは秋のものとして表れている。一方、後選和歌集²に次の歌がある。

- ゆく螢 雲の上まで いぬべくは 秋風吹くと 雁に告げこせ (252)
(訳：飛んでいるホタルよ、雲の上まで行くのなら、もう秋風が吹いて来たと雁に知らせておくれ)

この歌でもホタルは秋のものになっている。ただ、「秋の螢」として歌に詠まれている例は多くないが、日本の漢詩、和漢朗詠集³186 には次のようなものがある。

- 螢火乱れ飛んで秋すでに近し

² 951年以降成立 20巻約1400種

³ 1013年ごろに成立。藤原公任は漢詩・漢文・和歌から集めた詩文集。



辰星早く没して夜初めて長し

(訳：ホタルが乱れ飛んで、もう秋が近い

さそり座の星が早く沈んで、夜が初めて長くなった)

この漢詩ではホタルは秋のものだとは言っていないが、きわめて秋に近いものだといっている。丹羽（1992）によれば「漢詩の世界では『礼記』『月令篇』以来、ホタルは秋の景物とする伝統があり、上野氏、山崎氏論文も指摘されるように「秋の螢」は中国の螢の影響によって詠まれたものであろう。」ということだ。

4) 枯れて腐った草から生まれるとされている。

丹羽（1992）によれば、『礼記』『月令篇』に次のような詩句があるという。

- 季夏之月 腐草螢と為る

(訳：晩夏の月 腐った草がホタルになる)

また、和歌では「是貞親王歌合」で次のような歌が詠まれているという。

- 置く露に 枯ちゆく野辺の 草の葉や 秋の螢と なりわたるらむ

(訳：露がつくようになり、枯れていく野辺の草の葉が秋のホタルになっていく)

また、荻原（2014）によると大江匡房の歌に

- 五月雨に 草の庵は 枯れども 螢と成るぞ 嬉しかりける

(訳：五月雨に草の庵が枯れてしまったけれど、ホタルになったのでうれしいことだ)

という歌があるという。万葉・平安時代人にとって、中国文学が権威であった時代、生態のことに対する暗い人々が、その権威になびくことはやむを得ぬことであるが、ホタルが枯れた草から生まれるという歌はあまり歌われなかつたという。本間（1998）は「『腐草為螢』は日本人の感覚には合わず、それゆえ、漢詩文と深い結びつきを有する「是貞親王歌合」という特殊な歌合以外では詠まれることが殆ど無かつたのであろう。」と言つてゐる。荻原（2014）によれば、室町時代（1338 - 1573）の古辞書「下學集」に



- 「螢 腐草化して螢と成る者也」（訳：ホタル 草が朽ちてなったもの）

とあり、この考えは江戸時代の「和漢三才図会⁴」にも及んでいるという。しかし、同時代の本草学者小野蘭山は著書「本草綱目啓蒙」で

- 「凡螢は初夏油菜科を刈の候、多く出大中小の三品あり。皆水蟲より羽化して出夏後卵を生して復水蟲となる。腐草化して螢となるに非らず。雄なる者は光大なり。雌なる者は光小なり、川の大小を問わず年中水の断ざる川筋に多し云々」（訳：普通、ホタルはアブラナ科を刈る頃、多く出る。大中小と3種ある。すべて水の中の虫から羽化して、夏に出た後で卵を産んで、再び水の中の虫になる。オスは光が大きく、メスは小さい。川の大小を問わず、一年中水が流れているところが多い。）

として、現在の見方と大きく変わらない観察をしている。

このように見ると、平安歌人のホタルの歌は中国詩の影響を大きく受けて詠まれていることになるが、日本人の季節感や美意識に合わない3) と4) は後に歌われなくなってくる。また、本間（1998）によれば「八代集を見る限り、恋歌の螢には作者の感情が移入されており、これは中国文学では見られない、恋の螢の詠まれ方である。ここに恋歌独自の展開を見ることができる。」としている。この本間（1998）の主張は「玉台新詠」の初めに挙げた静的な恋歌と次の歌を比較すれば明瞭である。

- 音もせで 思ひにもゆる 螢こそ 鳴く虫よりも あはれなりけれ （後拾遺和歌集 216）
(訳：声に出さないで、思いを胸に秘めているホタルは鳴く【泣く】虫よりも哀れである)
- 物思えば 沢の螢も わが身より あくがれ出づる たまかとぞ見る（後拾遺和歌集 1162）
(訳：あなたのことを思えば、沢のホタルも私の身から抜け出した魂かと思う)

また、源氏物語「螢巻」にも次の歌がある。

- 声はせで 身をのみ焦がす 螢こそ いふよりまさる 思ひなるらめ

⁴ 1712年成立。寺島良安により江戸時代中期に編纂された百科事典。



(訳：声に出さないで、身だけを焦がすホタルは言うよりもっと深い思いをしているのでしょうか）

このようにホタルを物言わずにじっと耐えている存在、耐えかねて魂として現れるという発想は、こののち日本人のホタル観の一つを作っていく。そしてこれは、中国詩にはないものである。

一方、清少納言は枕草子（安西,1989）の第一段に次のように書いている。

- 夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、螢の多く飛びちがいたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光て行くもをかし。雨など降るもをかし。

ホタルは夏の風物詩であり、「をかし」なのである。「趣がある」や「うつくしい」と解釈してもいい。先にも書いたように和歌の中ではホタルを秋のものにする中国の影響は多くなく、丹羽（1992）によれば「『後拾遺集』の頃を境として、螢は、中国的な秋の螢から日本の季節感に沿う夏の螢へと変貌を遂げていった。」ということであるが、荻原（2014）によればこれが夏のものとされるようになるのは江戸時代になってからだということである。

また、遊磨・後藤（1999）によれば、宇津保物語にはホタルを多く捕まえ、それを袖の中に入れて見たり、見せたりしている記述があり、源氏物語では光源氏が兵部卿宮の前で几帳にホタルを放ち、玉鬘の姿を浮き上がらせており、ホタルの光への関心やその効能に関する好奇心は現在とも変わらないものがある。

3.3 平安時代以降のホタル

鎌倉・室町時代のホタル観は平安時代とあまり変わらないが、江戸時代（1603 - 1868）になると俳句などではこれまでの捕らわれた発想を離れ、自由なものになって行く。また、江戸時代後期には花見などのように行楽の対象になったり、「虫売り」が行われるようになり、鳴く虫と同じように商品として扱われるようになる。

まず十訓抄に現れるホタルについて見てみよう。十訓抄は鎌倉の中期に成立した、教訓的な説話を約280話集めたものだ。武士が政治的に権力をもったが、文化面ではまだ貴族文化が優位を占めていた時代だ。その十訓抄に次のような記述がある。



- 「或殿上人の五月廿日余いとくらきに、太后宮にまいりて、めどうにたたずみけるに、うえよりひとの音あまたして来りければ、さりげなく引かれてのぞきけるに、つぼのやり水に、螢のおほくすだくを見て、さきなる女房、ゆゆしき螢かな、雪を集たるようこそみゆれとて過ぎるに、次なる人、次なる人優なるこゑにて、螢火乱飛でと口ずさびけり。また次なる人、夕殿に螢飛でうちながむ。しりなる人、かくれぬ物はなつのむしのと花やかにひとりごちたり。」

(訳：ある殿上人が 5 月 20 何日（旧暦）かのたいへん暗い夜に皇太后（彰めどう子）の御所に参上して、馬道に佇んでいると奥からたくさんの女房たちが来たので、物陰に隠れていると、遣り水に螢がたくさん来ているのを見て、最初の女房が「たくさんの中の螢ね。集めたように見えるわ」と言った。その次の女房は「螢火乱れ飛んで」と言い、その次の女房が「夕殿に螢飛んで」と眺める。最後の女房は「隠れぬものは夏虫の」と独り言を言った。)

これは平安時代のエピソードであるが、この時代に取り上げることはまだ貴族の中では平安時代の面影が強いと考えられる。最初の女房の言葉でわかるることは貴族がホタルを集めて、庭に放していたことであり、2 番目 3 番目の女房の引用はどちらも和漢朗詠集からである。

2 番目の引用は「螢火乱れ飛んで、秋己に近し」という唐の詩人元稹の夜坐という詩の一部である。この詩ではホタルと秋の関係が言われているが、鎌倉時代に入っても宮中では依然中国文学の影響が続いていたのである。3 番目の引用は白居易の詩の「夕殿に螢飛んで 思ひ悄然」からである。また最後は後撰和歌集の

- 「つづめども かくれぬものは 夏虫の 身寄りあまれる 思ひなりけり
(209)」

(訳：包んで隠しても、隠せないのは夏虫のように出てしまう、私の恋心です。)

からの引用である。この歌では螢という言葉は出でていないが、この女房の言葉が螢を意味しているのは明白であり、螢は秋でなく夏の虫になっている。このように、この時代は中国的なものと日本的なものが混然としていると考えられる。また、(遊磨・後藤,1999)によると、鴨長明の作だと言われていたが、今ではそれが否定されている四季物語には以下の描写がある。



- 石山に詣でぬ、かへさえには蚩いくそばく、薄衣の器に包み入れて、宮の内に奉れば、ここらの御簾、或いは御局のそこらに、数多く放されて、春るる夜の星ともせしも、いひゑらず思ひたどりぬ。されどこの蟲も夜こそあれ、昼は色異様に夜の光にはけおされて、劣れる蟲也。まいて、手に触れ身に添えては悪しき香り移り来ぬ。

原文を見て行くと、石山は後にホタルの名勝地で有名になるところだが、この時代からすでにそのような描写がある。また、薄衣に包んで宮中に奉れば、御局などに放されるという描写がある。このように、ホタルを捕まえて庭などに放す風習はこの時ばかりでなく、それから以降どの時代にもにも行われたと考えられる。最後に面白いことが描かれている。それはホタルが一種独特の臭いをもっていることで、これは歌などでは歌われることのないホタルの特性である。

さらに遊磨・後藤（1999）によれば南北朝時代（1336 - 1392）に次の歌があるとう。

- 春日野や 霜に朽ちにし 冬草の またもえ出でて 飛ぶほたるかな（新葉春宮大夫師兼）
- 秋ちかき さわべの草の 夕露に 光かはすは ほたるなりけり （続後拾遺集：内大臣）

初めの歌はもうあまり詠われなくなったホタルが枯草から生まれ変わるという内容を含むものであり、もう一つの歌はホタルと秋を近づけたものだが、明治の発光研究者、神田左京によれば、このホタルはゲンジボタルと比べ発生が遅くなるヘイケボタルを詠んだ可能性が考えられるということである。

また閑吟集（浅野,2011）は1518年に成立したと言われているが、その中に次の歌がある。

- 我が恋は 水に燃えたつ螢々 物言はで笑止の螢
(訳：私の恋は水の上を光飛んでいる螢のようなもんだ。打ち明けることもできずにいる哀れなものだ)

ここでもホタルは言いたいことが言えず、じっと耐え忍ぶ象徴として表れている。

江戸時代に入ると、耐え忍ぶ象徴としてのホタルは山家鳥虫歌（閑吟集 P66 の注による）では次のように歌われている。



- 恋に焦がれて 鳴く蝉よりも 鳴かぬ螢が身を焦がす
(訳: 恋に身を焦がして鳴く蝉より、ホタルは鳴かないでいっそ身を焦がせている)

このように桃山時代（1568 - 1600）より使われるようになった三味線の伴奏で、小唄の世界では平安時代の一ホタル観を引き継いでいく。しかし、俳句に目を転じてみると、型にはまったホタル観はなくなる。三橋・小西（2014）により有名な3俳人の俳句を引用してみれば、以下のようなものがある。

- 草の葉を落つるより飛ぶ螢哉 （松尾芭蕉）
- 昼見れば首筋赤きほたるかな （松尾芭蕉）

暗がりの中で、葉に止まっていたホタルが何かの拍子に落ちてしまったが、その墜落の途中に飛んでいく、光の軌道を見た俳句である。また、二つ目の句はホタルを光との係わりだけとしてみない句である。

- ほたる飛ぶや家路に帰る蜆売り （与謝蕪村）
- 淀船の棹の雲もほたるかな （与謝蕪村）

蜆売りが、一日の仕事を済ませて家に帰って行く、その周囲をホタルが飛び交っているという日常のほのぼのとした情景を詠っている。二つ目の句は提灯か何かの光を受けた船の棹から落ちる雲を螢の光に見立てているのだが、平安時代に見立てられた星や漁火にくらべてずいぶん身近なものになっている。

- 呼ぶ声の張合に飛ぶ螢かな （小林一茶）
- 大螢ゆらりゆらりと通りけり （小林一茶）

後藤（2015）によると、螢狩という言葉の初見は筆者に寄れば延宝7年（1679年）刊行と推定される「談林功用群鑑」に「たばこ数寄末野々原や螢狩」という句に見いだされるという。ホタルを捕まえることは昔から行われていたが、螢狩りと言われるものになればホタルを捕まえる道具、籠、それに螢狩りの唄もそろってくるようになる。江戸時代の浮世絵を見れば大人も子供も螢狩りに興じている姿が映されている。この一茶の句はそんな情景をさっと切り取っているような句である。また、下の句はゆっくり明滅を繰り返すゲンジボタルをコミカルに描いている。

形式を重んじる和歌と違って、俳句は句を作るものの主觀が大事にされるが、このように江戸の3大俳人の句を見てみると、そこには有り余る個性が発現しているよう



に思える。これは江戸時代が到達した個人の精神域の広がりで、ホタル観もこれ以降多様になって行った。

もう少し後藤（2016）より当時の螢狩りの様子を考えてみると、俳句では以下の句が見受けられる。

- 螢こいと人はいふ也宇治の河 (林見)
- 螢こいと呼や豊前のこくらがり (梅翁)
- 三の間の水ハ甘ひか飛ふ螢 (翠翁)
- 飛螢其手はくわぬくわぬよや (一茶)
- 巣や螢々を呼ぶように (一茶)

また、狂歌には次のようなものがある。

- 来いと待螢は来て呼はぬ蚊のむしくる夜さや橋詰に出て (貞也)
- こちの水はあまいぞ桂あめの夜に子は螢取かはつゝみ (幾粒)

このような俳句や狂歌から、今でもホタル追いの唄として残っている「ホーホーホタル来い、こっちの水はあまいぞ、あっちの水はにがいぞ」（後藤,2018）のような唄を唄いながら、ホタル狩りを楽しんでいる姿が目に浮かぶ。当時よりホタル狩りは夏の風物詩として定着したものであろう。



図 1：江戸時代の浮世絵のホタル狩りの図⁵
の図⁶



図 2：江戸時代の浮世絵のホタル狩り

また、横井也有の鶴衣（石田,1997）の「百蟲譜」のところに以下のような記述がある。

- ほたるはたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水にとびかひ草にすだく、五月の闇はたゞこの物の為にやとまで覚ゆる。しかるに貧の學者にとらえられて、油火の代にせられたるは、此のものゝ本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ことの外の不自由なり。俳諧にはその真似すべからず。

⁵ Retrieved April 19, 2024, from

https://www.kumonukiyo.e.jp/index.php?main_page=product_info&cPath=8_20&products_id=373

⁶ Retrieved April 19, 2024, from <https://sizentaikennomori.boo-log.com/e231541.html>



ここでは中国から伝わって来たいわゆる「螢の光」について、辛辣な意見が述べられている。ホタルの光は貧しい学者の油火ではないと。俳諧において螢火をいう言葉は使うべきでないとも述べている。中国という権威に対するはっきりした反抗がある。また、「鳥獸魚虫の掟」というところでは「螢夜中火を燈し飛行之事、町々家込の所は火のもと氣遣敷候得ば遠慮いたすべく候。」と書いている。ホタルが飛んでいる夜中は家の多いところでは火に気使いすべきだと。この意見も江戸ならではのものの見方だ考えられる。

江戸時代は商業の発達により、一般庶民の生活も以前の時代と比べるとよくなってきた。参勤交代により、街道の整備がなされ、宿泊設備も整ってきた。一般庶民も伊勢参りをはじめとして、各地の神社仏閣への参拝を熱心に行うようになった。これは純宗教的な行為だけではなく、日常生活からしばらく離れて余暇を過ごそうとする現代的な言葉では「観光」に類する行為である。各地には名物が現れ、そういったものを目につしながら人々は日常から離れた異次元で自分を解放したのだ。竹内（2003）からは当時の人々が、いろんな形の行楽を楽しんでいたことをうかがうことができる。それらは「花見」「紅葉狩り」「打ち上げ花火」「虫聞き」「月見」、幸運を搔き込む熊手を求める「酉の市」、寺社の秘仏などを拝観させる「御開帳」、信仰の対象として富士山を登る「富士講」などいろいろあった。その一つに「螢狩り」もあったという。江戸でもホタルの名所が知られており、そこに人々が繰り出したという。三橋・小西（2014）によると、芭蕉に次の句がある。

- ほたる見や船頭酔ておぼつかな

これは江戸ではなく、今の滋賀県の瀬田川、ホタルの名所として知られていた石山でのことだということだが、当時のホタル見物の一つの在り方が、船に乗り、飲食しながら、また管弦を聞きながら見物することで、船頭もその酒を受けて酔っぱらっている情景を詠っている。日本人と自然の付き合いは昔から、このような飲食や管弦と共にする場合があり、現在まで残っている顕著な例として、「花見」を挙げることができる。このように日常から逃れて、リフレッシュのために多くの人々が行楽を楽しんだ。これはれっきとした観光に分類されると考えられるが、ホタルもこの観光の対象にされるようになってきた。

この時代のもう一つのホタル観の変化はそれを商品としてとらえるようになってきたことだ。都市化されてくると、周りの自然が失われていく。特にホタルのように開発に弱い昆虫は身近なところから素早く消えていく。もうホタル狩りもできなくなつた人々にはやはり郷愁があり、鳴く虫同様それを商品化すると、買う人も出てくる。



三橋・小西（2014）によれば、黒川道祐の「日次紀事」（1685）に「京に瀬田の螢売りが紗籠を持って売り歩き、人々は蚊帳の中や庭に放して楽しんだ」という記述がある。このころからホタルは商品としての価値をもつようになったと考えられる。江戸では螢は鈴虫と並んで主力商品として扱われ、虫を入れる容器と共に売られたということである。

4. おわりに

ホタルに関する資料は古い時代では詩歌に詠われたものを対象にするしか方法はなく、それは主に貴族階級のもので、日本人のホタル観がどこまで追求できるかは限界がある。しかし、万葉集には面と向かって詠われなかったホタルが、中国文学の影響を受けつつ、平安時代には独自なホタル観を持つようになった。梁塵秘抄⁷（佐々木,1984）には「常に消えせぬ雪の島 螢こそ消えせぬ火はともせ 巫鳥といへど濡れぬ鳥かな 一声なれど千鳥とか（十六）」という今様がある。「雪ならやがて消えるが、常に消えることのない壱岐の島、ホタルなら消えない火をを燈す。しとどは名前の意味がが濡れるなのに、水鳥ではないので、濡れない。一声鳴いても千鳥というのもいる。」ここには遊び心があり、和歌で詠まれるホタルとはかなり違う印象を受ける。ただ、残念なことにこのような資料はあまりなく、江戸時代までは一般的な和歌中心のホタル観になってしまふ。江戸時代に入って、上記した「本草綱目啓蒙」にはホタルが腐った草から生まれるという中国のホタル観を觀察によって否定する実証的なものの見方が生まれ、俳句の自由さに基づいた、自由なホタル観が生まれるようになつた。また、庶民が行楽を謡歌するようになって、ホタル狩りが各地で行われるようになった。ホタルを見ることが人々の娯楽の対象になったのだ。また、それを売るものが現れ、買うものが現れて、商売が成立し、ホタルは商品化されるようになつた。依然、日本の自然は豊かで、ホタルを商品として購入することも、ホタル狩りを行ふことも同じ行為の枠のうちにあったのだが、これが明治、大正、昭和と続く時代の中で、ホタルとホタルを取り巻く環境は激変し、ホタルの存在が危ぶまれ、そこから日本人はまた新しいホタル観を構築する必然性を持つようになるが、この江戸時代でのホタル観の変貌こそ、その契機となる新しいものの見方を生み出した最初の一歩になるものである。

⁷ 平安時代後期に後白河法皇によって編集された当時流行した歌をまとめた歌謡集。



参考文献

- 丹羽博之.(1992) . 平安朝和歌に詠まれた螢.大手前女子大学論集, (26),85-100. Retrieved February 28, 2024, from
https://otemae.repo.nii.ac.jp/record/1644/files/1992_wu_h085-100_niwa.pdf
- 萩原義雄. (2004.07.07 ~ 2014/07/20 更新). 「螢 Cruciate di Luciola」のこと. 駒澤大学, 1-8. Retrieved June 9, 2024, from <https://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/hotaru-Lampyridae.pdf>
- 本間みず恵.(1998). 「螢」考—平安和歌を中心に一. 日本文学研究年誌,(7),1-23. Retrieved February 28, 2024, from <https://ronbun.nijl.ac.jp/kokubun/01003235>
- 後藤好正.(2015). 「螢狩」という語が使われはじめた時期とその後の展開について. 豊田ホタルの里ミュージアム研究報告書 第 7 号 : 11-19 頁. Retrieved December 11, 2023, from
<https://www.city.shimonoseki.lg.jp/uploaded/attachment/16848.pdf>
- 後藤好正.(2016). 螢狩の唄を詠んだ狂歌・俳諧. 豊田ホタルの里ミュージアム研究報告書 第 8 号 : 183-190 頁. Retrieved January 18, 2024, from
<https://www.city.shimonoseki.lg.jp/uploaded/attachment/16865.pdf>
- 後藤好正.(2018). 螢狩の唄考 2 ~螢狩の唄の起源について~. 豊田ホタルの里ミュージアム研究報告書, 第 10 号:107-122 頁. Retrieved January 18, 2024, from
<https://www.city.shimonoseki.lg.jp/uploaded/attachment/16889.pdf>
- 陸生ホタル生態研究会. 日本産ホタル 10 種の生態. Retrieved December 15, 2023, from
<http://rikuseihotaru.jp/sub3.html>
- 遊磨正秀・後藤好正.(1999).文化昆虫ホタル～古典の中から～. 全国ホタル研究会誌, (32),10-16. Retrieved October 22, 2023, from
https://zenhokenstd.sakura.ne.jp/ZHJ_pdf31-40/ZHJ32_10-16.pdf



源氏物語：螢、与謝野晶子訳. 青空文庫. Retrieved April 19, 2024, from

https://www.aozora.gr.jp/cards/000052/files/5040_11669.html

十訓抄.たこつぼ通信. Retrieved April 30, 2024, from

http://www.wind.ne.jp/takotubo/musi_hotaru.html

浅野健二校注.(2011).閑吟集.岩波書店.

安西廸夫.(1989).文法全解枕草子.旺文社.

石田元季.(1997).鶴衣.岩波書店.

伊藤博.(2008).万葉集,上巻.角川学芸出版.

大津有一校注. (2008).伊勢物語.岩波書店.

加納康嗣.(2008).大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター編著. 鳴く虫セレクション江戸東京の虫売り：鳴く虫文化誌. 東海大学出版所.

小島憲之・木下正俊・佐竹昭広. (1976).萬葉集三.小学館.

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注.(2013).日本書紀（一）.岩波書店.

佐々木信綱校訂. (1984).梁塵秘抄.岩波書店.

大修館書店編集部.(2014).ビジュアルカラー国語便覧.大修館書店.

竹内誠監修. (2003).図説江戸江戸庶民の娯楽.学習研究社.

三橋淳・小西正泰. (2014).文化昆虫学事始め.株式会社創森社.